

# 私の2011年3月11日

伊藤 三平

東日本大震災は東京～市川で活動する私にとっても非常に怖い体験でした。この文を読まれる方に、震源地に近い被災地で激震、津波に遭われ、ご家族、親戚、知人を亡くされた方がいらっしゃれば、私の体験談など取るに足らないものですが、私自身、ここで死ぬかとの思いを抱いた体験でもあり、まとめておきます。

## 1. その日

妻が甲状腺のガンから肺に転移したガン細胞を退治する治療の為に、築地のガンセンターに入院し、その退院の日が2011年3月11日であった。

妻は平成10年に甲状腺ガンが見つかり、片方の甲状腺を削除した。それが再発し、さらに一部が肺に転移しているのが去年、発見できた。13年前の甲状腺ガンの発見も、その前に甲田先生の検査で、肝臓に異常があるかもしれないとのことで築地のガンセンターを紹介していただき、遺伝の心配もあるならば常に職場でも検査を十分に行うようにとのアドバイスを受けていたおかげで発見できており、甲田先生には感謝しております。

2010年、再発したが、主治医によると、第1回の甲状腺片側の除去手術時に、もう片方の甲状腺にもガン細胞がいる可能性もあったが、日常生活を考えて残していたとのことで、ある面、織り込み済みということでもあった。

今回の原発事故で、放射能が子供の甲状腺ガンを引き起こす懸念が広がったが、甲状腺の細胞は放射性ヨウ素を取り込みやすい性格を持つ。この性格を利用して、まず体内の甲状腺細胞を除去（片側の甲状腺も削除）してから、放射性ヨウ素を包みこんだカプセルを体内に取り込み、甲状腺から派生したガン細胞に吸着させて殺すという治療法が広く行われている。この治療の前に海草などヨウ素を含む食物を控え、ヨウ素が好きなガン細胞を餓えさせておくことも必要になる。

2010年、一度目を実施したが、この時は、甲状腺を切除しても、まだ身体の一部にその細胞が残っていたためか、肺のガン細胞までは殺せなかった。そこで2011年の3月7日からの2回目の入院になったわけだ。

ちなみに、このカプセルの放射線量は妻のメモによると1850メガベクレルという値だった。今回の原発事故でベクレル、シーベルトの単位は身近になったが、私は正確には説明できないもののメガ（百万）の単位である。壁に鉛を埋めてあるような隔離した部屋での治療であり、退屈、かつ話好きな人などにはつらい治療のようだ（TVなどは視聴可）。

おかげさまで、3月11日に終わった2回目の治療で肺に転移したガン細胞も根治できたようだ。

今回の騒動で、妻の主治医も政府の放射線対策の会議に呼ばれ、妻が再診時に別の先生が担当で、夜の原因事故関連のTVの片隅に主治医の先生が映るということもあった。

今回の大地震による原発問題で、放射能のことが頻繁に出てくるが、ちょっと不思議な感じがしている。

さて3月11日のことだ。妻が10時に築地のガンセンターを退院するから、着替え等を持参して出向く（治療中の衣類は放射能で汚染されており廃棄）。

当日の朝に仏壇のロウソク立ての、ロウソクを立てる部分の金属の棒が折れてしまった。そこで、退院手続きを済ませたあとに、築地から銀座三越に2人で出向き、和の道具のコーナーで洒落た真鍮のロウソク立てを購入した（親戚は、このことが大地震をご先祖様が知らせてくれたことだと言うが、どうだろうか）。

妻とはそこで分かれ、銀座の懇意の刀屋さんに出向く。そこで珍しい刀剣の本があったので購入する。重たい本を抱えて神田錦町の会社に戻った。

## 2. その時

社員は一人しかいない会社だが、外に出ており、会社は私一人だった。揺れが始まる。大きいなと思い、窓から近くの工事現場のクレーンの揺れを見ようと思った時だ。揺れはさらに大きくなり、入口近くのロッカー（服を入れる高さ180センチ、巾90センチ、奥行き50センチ強くらいのロッカー）がガタガタと倒れそうになる。入口であり、これが倒れると外に出るのに困ると思い、抑えに行く。そしたら、今度は社員のパソコンのモニターが大きく揺れる。ロッカーは倒れても凹むだけだが、ディスプレイは割れたら使えなくなると咄嗟に思ったか、今度はそちらを抑えに行く。その時、近くのコピー機が動きだした。それを足で押さえ、ディスプレイを手で押さえるという状態で、大きな揺れに身をゆだねる。

なおかつ揺れは続き、本棚の上段から本は飛び出し、壁際のロッカーに乗せた書類入れが落下、つられて棚上のスキャナーが落下してしまった。

それでも、なお揺れがやまず、大きくなる感じだ。古い雑居ビルの6階であり、他の部屋から女性の悲鳴が聞こえる。この時、本当に、ここで死ぬのかと感じた。

やっと揺れがおさまるも、しばし放心状態で窓の外他の建物を見る。工事現場のクレーンはまだ揺れていた。他の部屋の出入りも激しくなる。しばらくしたら、社員が帰社。帰り道で遭遇したとのことで、見上げるとビルがお互いにぶつかりそうになって、あるビルから清掃のおばさんが飛び出してきて「なんまいだ、なんまいだ」とつぶやいていたと。各ビルから溢れ出る人で歩道が大混雑、ただし近くのビルに倒壊はなく、ガラスなども落ちてはいないとのこと。

社員がインターネットにつながり、東北で大地震という情報をえる。救急車の音が遠くから聞こえてくる。後で九段会館の天井が落下して死者が出たというニュースを知ったから、その関係だったのかもしれない。

こういう時は、帰宅せずに会社にいるのがいいと冷静に思ったが、前述した「死ぬか」と思う怖い経験をしたから、こんなビルでは死にたくないと強く思う。エレベーター2機は動いていたが、廊下の天井の一部は剥がれ落ちていた。

近くのコンビニでウーロン茶のペットボトル、パン、カロリーメイトを購入する。大きな会社の社員は非常用持ち出しのリュックを背負い、頭にヘルメットをかぶって道路に大勢出ている。地下鉄小川町駅まで行き、駅員に運転状況を確認すると、あっけらかんと「今はどこも動いていないですし、復旧の目処は立っていません」と回答。これを聞いて、歩いて帰宅の腹が固まる。

会社のパソコン用ディスプレイをあらかじめ倒し、壁の絵も外す。社員も帰るというから、会社の前に「全員無事、帰宅」との貼り紙を貼る。帰宅の途中に大きな火災の発生が無いことをインターネットで確認し、また会社の窓から、千葉方面に黒煙が上がっていないことを確認した。もちろん、その日に購入した重たい刀の本などは会社に置いたままだ。

私は本八幡、社員は四街道。社員は「総武線沿いに歩いていけば、電車再開があった時にそこから乗ります」とのことだが、結局、電車は動かず、彼は拙宅で一夜を過ごし、翌朝、自転車を貸して四街道まで帰ることになる。

昔、私の家に地元で長く住む爺さんが「江戸へ五里」と書いた道路標識もどきを持参してくれ、庭に置いてあったことがあったが、歩くに20 kmは問題がない距離だ。毎週日曜スポーツクラブで38分かけて4 kmをウォーキングしているからだ。(ちなみに江戸時代の旅人は1日30~40 kmを歩いた。もちろん連日である。樺太探検をした間宮林蔵は1日に120 kmを歩いたとも言われている)

大学時代、本庄~早稲田の100 kmハイイクというのがあり、クラブの仲間と参加。10 kmで足にマメができ、それをかばっていたら膝、腰にきて45 kmで挫折したことがあった。45 kmと言っても朝の10時から歩きはじめ、夜の9時くらいかかった。この地点を過ぎるとコースは駅から離れ、あとは大学まで歩いてもらうしかありませんということで、やめたわけだ。残り2人は100 kmを歩き通し、「伊藤は軟弱だ」と馬鹿にされたものだ(この一人は水戸一高出身者で、後に恩田陸の小説『夜のピクニック』を読んだら、水戸一高には80 kmハイイクの伝統があったことがわかり、小説読後、彼に電話したことがある。「おまえは高校時代から80 kmハイイクで鍛えていたのか」と)

なお、会社のロッカーの中に古い運動靴が入れてあり、それに履き替えて出発した（古くなっており、下のゴムが堅くなっているのが気になったが、このような準備は必要と痛感）

2人で4時過ぎに神田錦町を出る。途中、タクシーでも拾えれば、行けるところまで乗車しようとも考えていたが、小川町まで行く本郷通りの間で断念した。空車はないし、渋滞は始まっていた。

小川町交差点から靖国通りを歩く。そして錦糸町の手前あたりから北に進路をとって、蔵前通りに出てから再度東に向かう。途中、私の携帯はつながらないが、社員のはよくつながる。これには頭にくる。歩きながら携帯でたわいもないことをしゃべっている女の子にも「こっちがつながらないのに、くだらないことをしゃべっているな」との気持ちになる。

やっとながると、名古屋にいる娘が家族宛に安否を心配しているメールだ。「当方は無事、今、歩いて帰宅中。各人、自分の身の安全第一に行動」と書いて送る。息子は就職活動中に遭遇し、その会社に結局泊めてもらうことになった。翌日に別の会社の試験予定だったが当然に延期となる。

途中、何のお店か失念したが、若い店員が道行く人に無料でペットボトルを提供しているのに遭遇し、偉いなと感心する。歩道はだんだん混んでくる。蔵前通りの車はまったく動かない。

道ばたの建物等も大きく損傷したのはなかったが、ガラスが落ちている箇所や、水が漏れだしている箇所があった。

だんだん、余裕が出てきて、休憩も兼ねて、平井駅近くで中華料理屋に入り、食事をす。中国人の店員もいて、神田から歩いてきたと言うと驚いていた。軟弱な中国人だ。

市川橋の手前のマクドナルドも混雑していたが、ここで休憩し、9時半頃に自宅に着く。社員の方は足が痛かったようだが、当方はまったく問題はなかった。

### 3. 歩いてみて思うこと

- ①今回は、沿道で火災などが発生していなかったから歩いても問題はなかったが、一箇所でもこのような事故があると大混雑して危険（消防車も渋滞で来られない）だと思う。
- ②特に、都心から千葉県へは、大きな川が、両国の手前の隅田川（靖国通りだと両国橋）、平井の手前の中川（蔵前橋通りだと江東新橋）、新小岩の手前の荒川（蔵前橋通りだと平井大橋）、小岩の手前の新中川（蔵前橋通りだと上一色橋）、そして千葉県に入る江戸川（蔵前橋通りだと市川橋）と5本もある。歩いていても、橋に入る前に人が集まってくる感じ

で、橋の通行が何かの理由でストップになれば大混雑になると思う（関東大震災でもこのようなことがあり、大災害につながったと聞く）。

- ③歩きはじめるならば早く決断した方がいい（スポーツクラブで一緒している人は、東京駅から私と同様に歩いて帰ったが、出発する時間が6時と私よりも2時間遅かったために「道が神社の参道みたい」に混んでいたところもあったと述べていた）。
- ④車の利用は最悪だ。ご近所の知人のお嬢さんは、会社の上司が千葉方面だからということで車で同乗して夕方6時頃に東京を出る。八幡に着いたのが翌朝の6時とのこと。神保町の浮世絵商の方は6時に神保町に出て、渋谷まで行くのに3時間を要したとのこと。

#### 4. 自宅

妻は、前述したように築地のガンセンターを退院し、私と三越で別れて帰宅。大地震の時は本八幡駅前の銀行のキャッシュディスペンサーの操作中だった。大きく揺れ、中にいたおばあさんが慌てて外に出たのを「外に出ると危ないですよ」と言ったとのことだが、それほどの大地震とは認識しなかったようだ。

買い物で西友に廻る途中の本八幡駅前は混雑していたが、西友に着くと醤油の匂いがして（醤油瓶が落下して破損？）、店員が今日は閉鎖しますと整理していたとのこと。

自宅に戻ると2階の娘の部屋の掛け時計が落下、妻の机横の書類などが落下していたが、他に被害、異常はなかった。

大地震後、遠方の方は市川も浦安も同じという感覚のようで、市川も浦安と同様に液状化したのではと心配していただいたが、拙宅あたりは今回は大丈夫だった。市川砂州の上だが、自宅は1200年前から鎮座しておわす葛飾八幡宮の境内に昔は含まれていた地であり、地盤は固まっているのだと思いたい。だが、今後の大地震ではどうだろうか。

自宅の近くでは、古くからの家で大きな物置蔵の屋根の一番上の瓦が崩落しているのが目立った損壊であった。

#### 5. 心境の変化

私は、36歳で独立して以来の手帳を残しているが、今年の手帳は異常だ。3月11日以降の12日（土）の自宅近くでの打ち合わせ、17日（木）の高崎出張、18日（金）の伊勢崎出張、19日（土）の千葉でのOB会、24日（木）の高崎出張に×がつけられ、14日（月）、15日（火）は「休み」と記している。16日（水）は午前中だけ出社し、出張をとりやめた17日、18日も「休み」にしている。

今回の大地震を経験し、何と云うべきか「はかなさ」を感じた。引き続いた、原発の事故

が心を重くしていたのも事実である。

この大地震のちょっと前に、同世代の知人と「我々は戦争も経験してないし、大きな地震にも遭遇していない日本史上、珍しく恵まれた世代だ」「そうだよな、会社の後輩から逃げ得世代と言われたよ」と会話をしていたことを思い出した。心底、ご恩返しが必要だと思い、生涯最高額の寄付を郵便局を通して日本赤十字社におこなった（もちろん、私ごときの生涯最高額であり、知れているが）。

大地震にも遭遇し、世の中のはかさなを感じると言う、方丈記の世界である。方丈記冒頭の章に「朝（あした）に死に、夕（ゆうべ）に生るるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。不知（しらず）、生れ死ぬる人、何方（いづかた）より来たりて、何方へか去る。また不知、仮りの宿り、誰が為にか心を悩まし、何によりてか目を喜ばしむる。その主（あるじ）と栖（すみか）と、無常を争ふさま、いはば朝顔の露に異ならず。或は露落ちて花残り。残るといへども、朝日に枯れぬ。或は花しほみて露なほ消えず、消えずといへども、夕を待つ事なし。」とある。

この後、安元の大火、治承の辻風、福原遷都、養和の飢饉、元暦の大地震を経験して鴨長明が見た惨状を具体的に書いていく。

今回も、まだまだ大地震は続くのではないかと怯えている。大地震も怖い、大きな被害が出るのは2次災害（火災、津波）だ。

参考：HPにアップするにあたり追記。

鴨長明の時代ではないが、幕末の江戸も以下のように大地震など災害が続いた。

- ①嘉永7年（1854）11月にマグニチュード8.4の安政東南海地震。江戸に限定した被害ではないが、対象地域全域で焼失・倒壊・流出家屋約6万戸。下田にいたロシアのディアナ号が大破。
- ②安政2年（1855）10月に安政江戸地震。作ったばかりのお台場が崩壊。今の大手町界限＝昔の日比谷の入江の地や、埋め立て地の深川、本所の被害大。水戸藩小石川藩邸も倒れ藤田東湖が死亡。倒壊家屋14,346戸、町方死者は3,950人。（町方以外の武士等の死者は不明）
- ③安政3年（1856）8月に江戸に大風水害（台風被害）。芝、品川、本所の被害大。
- ④安政5年（1858）にはコレラが大流行。7月末から江戸でも流行。広重もこれで死ぬ。『嘉永明治年間録』に寺社奉行の調査報告として28,421人の死者。

上記のような大災害が続き、「徳川様も先が危うい」との空気が生まれ、同時に「安政コロリは夷狄が持ち込んだ」という草の根攘夷感情が蔓延したそう。

